

蝶の博物詩

生態43

季節型(3)



キタテハ 秋型
(1999年10月10日 野尻湖)

photo by

Nishiyama



キタテハ 夏型
(2005年8月4日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態43

季節型(3)

春、夏または秋の季節によって、色彩、形が変わる蝶の季節型(季節的多型)は、学校などの制服の衣替え(更衣)とは異なる。衣替えは、6月1日に夏服に、10月1日に冬服にと一斉に替わるところに魅力がある。私の学生時代では、男子は海軍兵学校、女子では戦後の東洋英和女学院の制服がもっとも人気であった。夏の白い半袖のセーラー服と、冬のガーネットのネクタイでアクセントをつけた濃紺の冬服とは現在も変わっていないだろうか。当時、東京中の有名な私立女学校と公立のナンバースクールの名称をおのおのの制服によって“診断”できた。

色気がついたそのころから、戦争が不利となったこともあり、蝶の採集を自然にやめた。空襲で焼けた東京、横浜では蝶を見ることができなかったが、彼らがまったくいなくなったわけではない。蝶に関心がなくなったので、眼に入らなかったのだ。“主訴以外の皮膚の変化にも注目しないと潜在している内臓病変に気がつかない”，ということにのちに気づいた。

蝶の季節型を生ずる要因として、幼虫、蛹の時期の日照時間(明期または暗期という立場がある)と温度が重要であると考えられていた。すなわち、前号(40巻12号)のサカハチチョウやモンシロチョウ、キマダラヒカゲ、イチモンジセセリなどでよく調べられているが、2齢の幼虫のときから日照時間の短い条件で飼育すると休眠蛹を生じて春型が羽化し、明期の長い場合には非休眠性の蛹となって夏型の成虫が生ずる。

昆虫の成長、変態、脱皮に関わる脱皮ホルモンecdysoneがドイツのブテナントによって、日本から戦争中に送られた100万個のカイコの繭から純粋分離した話はすでに述べたが、蝶の幼虫には2齢当日から脳がホルモンを分泌する日の直前までに経験した日照時間(日数)によって、春型か夏型かいずれの季節型になるか、または休眠するかを決めていると考えられる。昆虫の能力はまさに驚くべきものである。

季節型の違いには色彩だけではなく、翅の形の差としても現れる。キタテハ、シータテハなど成虫越冬するタテハチョウでは、第一化の成虫は5月ごろから出現し、連続的に夏型の発生を繰り返して、9月ごろから秋型が出る。秋型の蝶の翅の外縁は凸凹が多く、その裏側は枯葉そっくりの色となる。北海道の山地にいるシータテハの越冬した秋型の蝶は日照不足と寒気のために夏型とならず、秋型が生まれることがある。

かつて私の家は鎌倉女学院の隣にあった。学校舎は木造の2階建てで、塀のない校庭の屋をのぼると拙宅の庭(というより、畑、松林であるが)に出る。休み時間にはときどき生徒が入って来て、話し合っていた。戦後数年しか経っていないころなので、制服姿の生徒は少なく、母や姉の学校の服やセーター、シャツのようなものを着ていたと思う。下駄履きの少女も目立った。その中の1人、学校を挟んで反対側の家に住んでいた少女がのちに私の妻となった。

西山茂夫